

応力関数法による偏平Right Helicoidal Shellの解析解について

東京電機大学 正員 ○井浦雅司
早稲田大学 正員 平嶋政治

1. まえがき

シェル構造解析においては、shallow近似が多く行われているが、Right Helicoidal Shell (R.H. シェル) においては、O'Mathuna¹⁾により $\alpha/\theta < 1/6$ であれば shallow シェル理論による数値結果の誤差は、より厳密な理論の 1% 以内であることが報告されている。R.H. シェルに関する研究は、初期接せん板とらせん板とに分けられるが、多くの場合は端部にのみ荷重を受けるシェルの解析である。^{2), 3)}

一方、等分布及び集中法線荷重をうけ、周辺で支持されたらせん板を扱った研究としては、エネルギー法に基づく近似解が報告されているだけ^{4), 5), 6)}で、解析解を求めた研究

はない。本報告においては、shallow R.H. シェルの解析解を応力関数法により求め、種々の境界条件及び剛性の下に数値計算を行い、その静的挙動について調べる。

2. R.H. シェルの解析解

Fig. 1 に示すような $r = r_0, r_1 (> r_0)$ 及び $\theta = \theta_0, \theta_1 (\theta_1 - \theta_0 = \alpha)$ において境界を有するシェルを考える。

応力関数 ϕ 、面内の荷重ポテンシャル Ω 、シェル中央面の法線方向変位 w 、法線方向分布荷重 P_m を用いると、Vlasov 型の微分方程式は次式の様に書ける。⁷⁾

$$\begin{aligned} \nabla^2 \nabla^2 w + \beta^2 \frac{\partial \phi}{\partial r} \frac{\partial}{\partial r} \left(\frac{\partial \phi}{\partial r} \right) &= \widehat{P}_m, \\ \nabla^2 \nabla^2 \phi - \beta^2 \frac{\partial \phi}{\partial r} \frac{\partial}{\partial r} \left(\frac{\partial w}{\partial r} \right) &= \nabla^2 \widehat{\Omega} \end{aligned} \quad (1-a, b)$$

ここに

$$\begin{aligned} \beta^2 &= \frac{\partial^2}{r^2} + \frac{\partial}{r \partial r} + \frac{\partial^2}{r^2 \partial \theta^2}, \quad \widehat{\phi} = \frac{\beta^2 \phi}{E t}, \\ \beta^4 &= \frac{(2(1-\nu)^2)}{t^2}, \quad \widehat{\Omega} = -\frac{(1-\nu)/\beta^2 \Omega}{E t}, \quad \widehat{P}_m = \frac{P_m}{D} \end{aligned}$$

であり、(r, θ) は極座標、 E は Young 係数、 ν は Poisson 比、 t はシェル厚、 D は曲げ剛性である。(1)式の解は

$$w = w_p + w_c, \quad \phi = \widehat{\phi}_p + \widehat{\phi}_c \quad (3-a, b)$$

と書け、ここに w_p 及び ϕ_c はそれぞれ特解と余分函数である。なお本報告においては、 $\theta = \theta_0, \theta_1$ において次の境界条件が成立つものとする。

$$w = M_\theta = u = N r \theta = 0 \quad (4)$$

まず鉛直方向等分布荷重 P_m が作用した時の特解を求める。 P_m を θ 方向にフーリエ展開すると、 P_m 及び Ω は(4)式の根は、全てが実根である場合と、4 根が実根で

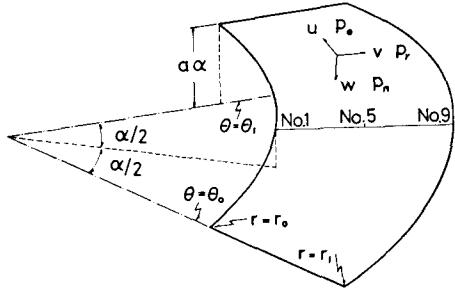


Fig. 1 R.H. シェル

それ次式の様になる。

$$P_m = \sum_m P_m \sin E_m \theta, \quad \Omega = -\sum_m \alpha E_m^{-1} P_m \cos E_m \theta \quad (5-a, b)$$

ここに

$$E_m = \frac{m \pi}{\alpha}, \quad P_m = \frac{2 P_0 \{1 - (-1)^m\}}{m \pi} \quad (6-a, b)$$

(5)式を(1)式へ代入して特解 $w_p, \widehat{\phi}_p$ を求める。

$$w_p = \sum_m (S_{1m} r^4 + R_{1m} r^2) \sin E_m \theta, \quad (7-a, b)$$

$$\widehat{\phi}_p = \sum_m (S_{2m} r^4 + R_{2m} r^2) \cos E_m \theta \quad (7-a, b)$$

となり、ここに

$$S_{1m} = \frac{P_m}{D} \frac{\delta_1}{\{(\delta_1)^2 - (\delta_2)^2\}}, \quad S_{2m} = \frac{P_m}{D} \frac{\delta_2}{\{(\delta_1)^2 - (\delta_2)^2\}},$$

$$R_{1m} = \frac{P_m}{E t} \frac{\delta_4}{\{(\delta_1)^2 - (\delta_4)^2\}}, \quad R_{2m} = \frac{P_m}{E t} \frac{\delta_3}{\{(\delta_3)^2 - (\delta_4)^2\}},$$

$$\delta_1 = E_m^4 - 20 E_m^2 + 64, \quad \delta_2 = 6 \alpha E_m \beta^2,$$

$$\delta_3 = E_m^4 - 4 E_m^2, \quad \delta_4 = 2 \alpha E_m \beta^2,$$

$$\beta^2 = -\frac{Q(1-\nu)\beta^2 E_m}{E t} \quad (8-a, b)$$

次に余分函数を求めるが、境界条件式(4)を考慮すると、

$$w_c = \sum_m W_m(r) \sin E_m \theta, \quad \widehat{\phi}_c = \sum_m \widehat{\phi}_m(r) \cos E_m \theta \quad (9-a, b)$$

(9)式を(1)式の高次方程式に代入すると、変数 r のみの常微分方程式が得られ、さらに Frobenius の方法を用いて

$$W_m(r) = A r^{1+\lambda}, \quad \widehat{\phi}_m(r) = B r^{1+\lambda} \quad (10-a, b)$$

とおくと、 A 及び B が非自明解を持つ条件として以下の

式に満足する 8 次の代数方程式を得る。

$$\{ \lambda^4 - 2(1+E_m^2) \lambda^2 + (1-E_m^2)^2 \}^2 - (2 \alpha \beta^2 E_m \lambda)^2 = 0 \quad (11)$$

残りの 4 個が虚根の場合の二通り考えられるが、ここで
は後の場合について考える。この時、(11) 式の根は

$$\lambda_{2j-1} = -\lambda_{2j} = \eta_j \quad (j=1, 2), \\ \lambda_j^* = \kappa \pm i\mu, \quad \lambda_j'' = -\kappa \pm i\mu \quad (12-a, b)$$

と書け、ここに η_j, κ, μ は実数であり、 $i = \sqrt{-1}$ である。
変位が実数であることを考慮するヒ、変位関数 $W_m(r)$ は
次の様な形に書くことができる。

$$W_m(r) = \sum_{j=1}^2 (A_{2j-1} r^{1+\eta_j} + A_{2j} r^{1-\eta_j}) \\ + \bar{A}_5 r^{1+\kappa} \cos(\mu \ln r) + \bar{A}_6 r^{1+\kappa} \sin(\mu \ln r) \\ + \bar{A}_7 r^{1-\kappa} \cos(\mu \ln r) + \bar{A}_8 r^{1-\kappa} \sin(\mu \ln r) \quad (13)$$

ここに

$A_5 = \frac{1}{2}(\bar{A}_5 \mp i\bar{A}_6)$, $A_6 = \frac{1}{2}(\bar{A}_7 \mp i\bar{A}_8)$ (14-a, b)
であり、(1) は実数を示す。次に A と B の関係を求めると、
 λ が実数の場合 ($j=1 \sim 4$) と虚数の場合 ($j=5 \sim 8$) とに分
けてそれぞれ次式の様に求まる。

$$B_j = T_j \pm A_j \quad (j=1 \sim 8) \quad (15)$$

(a) $j=1 \sim 4$ の時

$$T_j = \frac{2\alpha\beta^2\epsilon_m\lambda_j}{\lambda_j^2 - 2(1+\epsilon_m^2)\lambda_j^2 + (1-\epsilon_m^2)^2} \quad (16)$$

(b) $j=5 \sim 8$ の時

$$T_j = T_j^* + i T_j^{**}, \\ T_j^* = \frac{2\alpha\beta^2\epsilon_m(\lambda_j M_1 + M_2)}{(M_1)^2 + (M_2)^2}, \\ T_j^{**} = \frac{2\alpha\beta^2\epsilon_m(M_2 M_1 - \lambda_j M_2)}{(M_1)^2 + (M_2)^2}, \\ M_1 = (\lambda_j^2 - \mu_j^2)^2 - 4\mu_j^2/\lambda_j^2 - 2(1+\epsilon_m^2)(\lambda_j^2 - \mu_j^2) + (1-\epsilon_m^2)^2, \\ M_2 = 4\lambda_j\mu_j(\lambda_j^2 - \mu_j^2 - 1 - \epsilon_m^2) \quad (17-a \sim e)$$

ここに、 η_j 及び μ_j は以下の式で表わされる。

$$\lambda_j = \kappa \pm i\mu_j \quad (j=5 \sim 8) \quad (18)$$

(15) 式を用いると、変位関数 $W_m(r)$ は次式の様に求まる。

$$\tilde{\theta}_m(r) = \sum_{m=1}^2 (A_{2j-1} T_{2j-1} r^{1+\eta_j} + A_{2j} T_{2j} r^{1-\eta_j})$$

$$+ \bar{A}_5 r^{1+\kappa} \cos(\mu \ln r) - \bar{A}_6 \sin(\mu \ln r) \} \\ + \bar{A}_6 r^{1+\kappa} \{ \bar{T}_5 \cos(\mu \ln r) + \bar{T}_6 \sin(\mu \ln r) \} \\ + \bar{A}_7 r^{1-\kappa} \{ \bar{T}_7 \cos(\mu \ln r) - \bar{T}_8 \sin(\mu \ln r) \} \\ + \bar{A}_8 r^{1-\kappa} \{ \bar{T}_9 \cos(\mu \ln r) + \bar{T}_{10} \sin(\mu \ln r) \} \quad (19)$$

ここに

$$T_j = \bar{T}_5 \pm i\bar{T}_6, \quad T_j'' = \bar{T}_7 \pm i\bar{T}_8 \quad (20-a, b)$$

3. 数値計算例

R.H. シェルの数値計算に際し、 $r = r_0, r_1$ において以下の境界条件を考える。

$$B-1) \quad W = M_r = N_r = N_{r0} = 0$$

$$B-2) \quad W = M_r = U = V = 0 \quad (21-a, b)$$

シェルの材料定数は曲げ剛性が全て同じとなる様 K 、以下
の三つの場合を考える。なお $\nu = 0$ と仮定した。

$$M-1) \quad E_1 = 0.168 \times 10^8 + m^2, \quad t_1 = 0.05 \text{ m}$$

$$M-2) \quad E_2 = 0.21 \times 10^7 + m^2, \quad t_2 = 0.1 \text{ m}$$

$$M-3) \quad E_3 = 0.2625 \times 10^6 + m^2, \quad t_3 = 0.2 \text{ m} \quad (22-a, c)$$

なお、シェルの寸法は以下の通りである。

$$r_0 = 5 \text{ m}, \quad r_1 = 10 \text{ m}, \quad \alpha = R/2, \quad 2\pi\alpha = 5 \text{ m} \quad (23-a, d)$$

荷重としては、鉛直方向等分布荷重を考え、 $P_0 = 0.3 \text{ t/m}^2$
とおき、フーリエ級数の項数は $m=15$ である。Fig. 2~4
に数値結果を示すが、参考のために扇板のたわみ及び曲
げモーメントも併せて図示した。

4. 参考文献

- 1) O'Mathuna: J. Math. Phys., 42 (1963), pp. 85~111.
- 2) Knowles & Reissner: Quart. Appl. Math., Vol. 17 (1960), pp. 409~422.
- 3) Wan: J. Appl. Mech., Vol. 35 (1968), pp. 382~392.
- 4) 西村: テンソルとシェル理論 (彰国社)
- 5) 大山・土橋: 日本建築学会論文集, No. 265, pp. 53~61.
- 6) 平島・井浦: 第13回アトリック解析法研究発表論文集, pp. 143~148.
- 7) 平島・井浦: 第29回応力連合講演会論文抄録集, pp. 141~142.

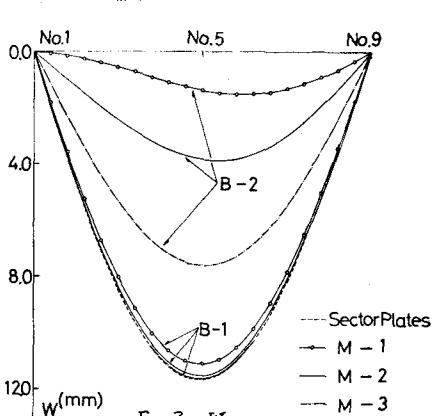


Fig. 2 W

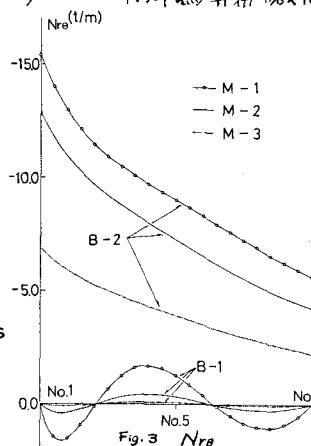


Fig. 3 N_r

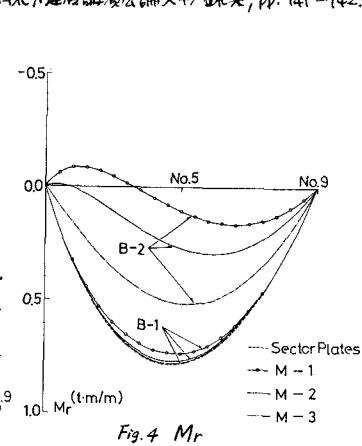


Fig. 4 Mr